

市民および地球市民について

東京大学名誉教授、元清泉女子大学地球市民学専攻教授

庄司 興吉

清泉女子大学大学院地球市民学専攻で2015年11月、「近隣アジアの市民の目に映る『ニッポン』:この70年の対日イメージの変遷」という公開シンポジウムが開かれ、参加させていただいた。たいへん有意義なシンポであったと思うので、論ずべきことはたくさんあるが、私の今の観点から急いで指摘しておきたいことがある。

中国、韓国、インドネシア、フィリピンから4人のシンポジストが招かれ、彼らに質問紙をつうじて質問する機会を与えられたので、私は、かねてから気になっていたことを聞いて見た。それぞれの国では、市民という言葉はどういう意味で使われているか、良い意味でか悪い意味でか、地球市民という言葉は使われるか、使われるとしたらどういう意味でか、という質問である。これに4人の論者がそれぞれ適切に答えてくれた。

中国の王偉氏は、市民という言葉は、使われるが、たとえば北京市の市民という意味で使われることが多い、日本でいう市民は「公民」というのが普通だ、そういう意味で地球公民という言い方がされることもある、と答えてくれた。

韓国の金泳徳氏は、市民という言葉は1987年以降の民主化の過程でよく使われてきた、今でもその意味で使われる、地球市民という言葉は使われない、と答えてくれた。

インドネシアのパクティアル・アラム氏は、市民という言葉はマルクスに関連して強い意味で使われてきている、最近では人権や環境に関連して使われることが多い、地球市民 *global citizen* という言葉は普通ネティズン *netizen* という意味で使われる、多くは良い意味でだ、と答えてくれた。

最後にフィリピンのカール・イアン・チェンチュア氏は、インドネシアに似た状況もあるが、市民という言葉はあえて言えばジェンダーとの関連でも使われる、だからどういう意味で使われるか注意する必要がある、とくに *global citizen* という言い方は国境を越えて出稼ぎする人などにも使われる、*global relations* と関係するという文脈だ、と答えてくれた。

私は、我が意を得たり、と思った。私がこういう質問をしたのは、日本の知識人の多くが第二次世界大戦後の市民主義の影響を受けていて、市民とは市民社会の担い手であり、主体的に自分たちの社会を形成していく人間、すなわち主権者である、と考えていることが多いからである。その文脈で、社会が拡大してきて地球社会を考えなければならないということになると、当然地球社会の主権者としての地球市民という考え方が出てくる。

10年前、私が中心になって清泉に大学院地球市民学専攻を創ったとき、私が考えていたのもそういうことであった。しかし、私は同時に、ずっと前から市民という言葉に引っかかりも感じていた。国内的に言うと、市民には都市民という意味があるから、農山漁村の人びとはあまり親近感を持っていない。悪くすると、都市の連中は、自分たちの作った食

糧その他で生活しながら、カッコ良く左翼的なことばかり言っている、というふうに感じている人たちも少なくない。

また、世界的に言うと、途上国の人びととくに民衆には、欧米の市民たちが「国民国家」なるものを押し立ててやってきて、自分たちの国を植民地化し、自分たちを奴隷のように扱ってきた、という集合記憶があるのではないかと私は思ってきた。欧米文化の影響を受けた知識人は市民を積極的な意味で使ったりするが、日本の場合と同様これには十分注意する必要があるのではないかと、ということである。

4人のシンポジストの意見は、こういうことをほぼ裏付けているのではないかと私は感じた。

中国では、日本の市民主義者が言ってきた市民のことを、形式的に「公民」という。これは現行の中国憲法でもそうなので、私は知っていた。その意味で、「地球公民」という言い方がなされることもある、と王氏は明言した。これは収穫である。王氏にもっと聞いて見たかったが、日本でいう実質的な市民に当たる本当の主権者は、中国では人権活動や言論行為などで抑圧されている人びとのあいだから、少しずつ現れてくるのではないかと。

韓国の金氏が、市民という言葉が民主化との関連で、したがって日本で使われているのとほぼ同じ意味で、使われてきている、といったことも重要である。ただ、グローバル化のことを「世界化（セゲファ）」という韓国で、地球市民という言葉が使われていないというのは重要だと思う。もっと他の韓国の方の意見も聞いてみる必要があるが、北との緊張を抱えている韓国では、社会が「世界化」してきたから、今やわれわれは地球市民にならなくてはならないのだ、などというほど、現実には甘くないのだと思う。

インドネシアのアラム氏の意見は、明らかに、インドネシアの知識人の意見である。市民がマルクス主義の影響を受け、社会を変革する主体という意味で使われ、最近ではそれが人権問題や環境問題に関連づけて使われるというのは、日本の市民主義の視点からしても大いに頷ける。地球市民という言葉が、インターネットの普及とともにネティズンの意味で良いニュアンスで使われているというのも、まったく頷ける状況である。

だが、アラム氏は、私のような日本の知識人に答えているという意識が強くて、インドネシアの一般民衆が市民という語をどのように受け取り、どのように感じているかについては語らなかったのではないかと私は感じた。そして、その分、フィリピンのチェンチュア氏が、フィリピンの民衆がたとえば地球市民という言葉はどういう意味で使うかを示してくれる形で、フィリピンや（おそらくはインドネシア）の民衆が市民という語にこめている意味を語ってくれたのではないかと、感じた。

チェンチュア氏が、フィリピンの人びとが地球市民という語を、グローバルな関係との関連で外国に働きに行く人、つまりは移民労働者という意味で使う、と言ってくれたのは、彼がどこまで意識していたかはともかく、想像以上に重大なことなのではないかと私は思う。これはつまり、フィリピンの人びとが、私の考えるような地球市民、すなわち地球

的な視野をもつ主体的な市民という意味ではなく、今日の国際関係、すなわち相対的に貧しい国が相対的に豊かな国に労働力を送り出さざるをえない関係のもとで、じっさいに働きに行く人、というよりも行かざるをえない人びとを指して使っている、ということだからである。

地球市民という語は、この意味では、現代世界の格差構造、つまり旧宗主国やそれにとって代わるほど豊かになりつつある国と、いまだに植民地のように貧しい国とのあいだで、後者から前者に働きに行く人、行かざるをえない人を意味しているということであり、いわば現代世界の新植民地主義的構造のもとでの弱者を指しているのである。

私は、長い、苦渋に満ちた考察の末、市民という言葉は、社会の主権者という意味だけでなく、市民革命をつうじて先進国の主権者となり、王や富裕者の始めた世界の植民地支配を継承し、世界を支配してきた権力者という意味も持っているのではないかと考えるようになった。市民はそのことを厳しく反省し、長いあいだの植民地支配からようやく自らを解放して、民主社会を創り始めた旧植民地諸国の民衆の立場に立たないと、本当に自分の社会、そして地球社会の主権者にはなれないのではないかと。

そういう考え方をすると、今回のシンポのなかで、インドネシアやフィリピンの人たちが、オランダやスペインやアメリカの長い植民地支配の歴史があるがゆえに、第二次世界大戦中の日本の植民地支配には相対的に寛容だと言われたことや、韓国や中国が逆に、日本による、比較的長い、そして広範かつ残虐な植民地支配と侵略行為があったがゆえに、日本の歴史認識やそれをふまえた外交その他に厳しい、日本政府が何度も謝らせられるというが、なんと謝っても（またすぐ靖国に参拝するなど）それらしい行為を取っていないのではないかと、言われたことも、あらためて重大な意味を帯びてくる。

つまり、市民および地球市民という言葉は、欧米列強が世界を植民地化し、市民革命後、市民たちが世界の植民地支配を引き継いだこの 5 世紀の世界史、そして日本が、かろうじて植民地化を免れ近代化したものの、欧米列強に伍して東アジアおよび東南アジアでの植民地支配をめぐる抗争に加わったこの 1 世紀半のアジア史、を正確にふまえて再定義されなくてはならないのである。そうしなければ、市民社会論も地球市民学も本当に積極的な意味は持ちえない。

私は、そういう視点から、社会学を、たんなる市民の学としてではなく、本当に主権者の学として創り直し、そのうえに、旧植民地諸国の民衆を視野の中心にすえた、本当の主権者の学を創りたいと思っている。市民社会論も地球市民学も、そういう主権者学をふまえて創り直さなくてはならないと思う。

(2015 年 11 月 10 日)